

カトリック・ミッションの言語戦略と中國

高田時雄

宗教がその發源地から更に大きな世界に向かって發展しようとするとき、同時にそれを載せる言語の勢力が伸張することは當然であり、宗教圏の擴大はすなわち言語圏の擴大でもあった。大航海時代というまたとない時勢に巡り會ったカトリックの布教活動は、その主たる擔い手であったイベリア半島の二大帝國スペイン・ポルトガルの言語的膨張を引き起こしたのである。同じ頃ヨーロッパでは、ラテン語が支配した時代は次第に終焉を迎えつつあり、俗語への傾斜と期待が高まりつつあった。ネブリハがその『カスティリア語文法』(一四九二)の序文中に、ヘブライ・ギリシャ・ラテン語の歴史になぞらえて、スペイン語の勝利と永遠の繁榮を高らかに主張するのは、新世界が陸続とその言語の支配下に入ろうとするまさにその時でもあった¹。ラテン語は宣教師たちにとっても厄介な古典語であり、日常では俗語が優先して用いられたことは言うまでもない²。しかし異文化の接觸の場において、もっとも核心的な問題となるのはまさに言語である。ポルトガル人やスペイン人が進出した世界各地で、言語の相異が引き起こしたさまざまな反撥は容易に推測が出来る。オリヴェイラはその『ポルトガル語文法』(一五三六)の前書きにおいて、アフリカ、ギニア、ブラジル、インドといったポルトガル領の新世界では、現地の住民は言葉が異なるという、ただそれだけの理由で (so polla diferença da lingua) ポルトガル人を快く思わない、反對にそこで生まれたポルトガル人は同じ言葉を語るということで同胞を好ましいと思うのだ、と指摘している³。新領土の経営と統治の方法において、スペインとポルトガルの間で本質的にそう大きな違いがあったわけではない。ネブリハとオリヴェイラの説くところがニュアンスを異にするのは、単に撰述年代の先後と、その間に行われた新領土の施政経験によって浮き彫りになった言語の諸問題が反映されているに過ぎない。ともあれ、布教と併行して南米を初めとする多くの土地で住民のスペイン語化・ポルトガル語化が押し進められたことは明かな事實である。では十六世紀後半以降、中國に押し寄せたカトリック・ミッションは、中國の言語と如何に對峙したのであろうか。またその結末は如何なるものであったのであろうか。

十五世紀末、ポルトガルはアフリカ大陸を大きく迂回して、ついに喜望峰を越えた。次いでインドのゴアに根據地を築き、さらにマラッカ、マカオまで、着々とその勢力圏を擴大していくのだが、極東に至って日本・中國など未知のしかもヨーロッパの傳統とは全く異なる文明と遭遇することになる。ある意味において自分たちの文明よりも遙か高度に發達した文明及びその言語と向き合う中で、それまで採用してきた布教方法も質的轉換が計られるようになる。いわゆる適應主義であり、その戦略を立てた張本人がイエズス會巡察使アレックスandro・ヴァリニャーノであった。イエズス會はポルトガルと結んで、マカオを根據地とし、先ず日本、やがて中國に熱心な布教活動を展開し

¹ Antonio de Nebrija, *Gramática de la lengua castellana*, 1492. ネブリハには近年中岡省治氏による日本語譯が存在し、便利である。『カスティリア語文法』「大阪外國語大學學術研究雙書」十四、一九九六。

² イエズス會アジア布教の總監督の地位にあった巡察使ヴァリニャーノ自身ですら、イエズス會總長宛の書簡にラテン語を用いないことの言い譯として、ラテン語の十分な能力がないことを告白している。一五七七年九月十六日付メルキュリアン宛書簡 (ARSI, J.S. 8-I-172)。J.F.Moran, *The Japanese and the Jesuits, Alessandro Valignano in the sixteenth-century Japan*, London and New York, 1993, p.37.

³ Fernão de Oliveyra, *Grammatica da lingua portuguesa*, 1536. 丸山徹 (Toru Maruyama) 氏による、KWIC 索引に附載のテキストを利用した。Key word-in-context Index of the Grammatica da lingua portuguesa (1536) by Fernão de Oliveyra, Nanzan University, Nagoya, 2001.

た。一方ではポルトガルとは反対側の太平洋を越えてきたスペインがマニラに據点を置いて、アウグスチノ會・ドミニコ會・フランシスコ會など托鉢修道會系の會派を中心に海を越えて日本・中國に布教を試みていた。この二つは布教方法をめぐって、事あるごとに對立し、最終的には典禮問題による悲劇的結末に至るのである。ともあれ中國布教の榮光を最初に擔ったのはマカオを據点とするイエズス會士のほうであった。ヴァリニャーノの學生であり、適應主義の熱心な實踐者であったマテオ・リッチは一六〇一年に待望の北京へ進出することが出来た。彼らは熱心に中國語を學習し、中國人の衣服を身につけ、中國知識人と同じ生活をする中で、中國人の信頼を得ようとした。とくに言語の習得は最重要課題であった⁴。中國人になりきることで、いわば内側から布教を成功に導こうとしたのだともいえる。しかし中國の朝廷から見れば、イエズス會士は、數學や天文、地理、醫學といった科學、あるいは繪畫や音樂など藝術の分野で、特殊な才能を持った臣下であるに過ぎず、布教はいわばその報奨として認められる恩典であった。カトリック宣教師の側と、中國側の見解とは、實は大きな懸隔があったのであるが、宣教師の側では常にみずからに引きつけて解釋してしまう傾向があった。中國在住の宣教師は、さらに「票」⁵を受領して生涯を中國で過ごすことが前提であり⁶、しばしば母國語を忘れてしまうようなことすらあった。彼らは名實ともに中國の土となったともいえる。その意味では中國國內においては、言語間の矛盾は宣教師個人の問題に留まり、社會的な廣がりをもつことはあり得なかった。適應主義の行き着くところは、言語的にも中國語世界への同化であり、他の諸地域で生じたような事象は生じ得なかったといえよう。

ただマカオというポルトガル人の居留地ではかなり事情が異なっていた。ここでは中國人以外にも、ポルトガル船によってマレー半島やインドからやって来た人々が複雑な社會を形作っていた⁷。この土地では日常用語としてポルトガル語を基礎とするクレオールが用いられ、近い過去までこれを母語とする人々もいたのである⁸。その意味では、中國南端の渺乎たるこの小半島のみはポルトガル語によって征服されたのだともいえる。しかしマカオはポルトガル人にとって所詮、毎年地代を支拂って借りている租借地であって、中國との交渉では常に中國官憲を立てなければならぬ運命にあった。言語においても同然で、公式文書はすべて漢文によって書かれねばならなかったのである。したがって嘉慶年間、マカオの司政官が中國側に對し、漢文とともにポルトガル文を用いることを願ひ出たときにも、にべもなく拒絶されたのは當然であった。いわく「天朝（中國）にはこれまで定った制度があり、華夷のあいだのけじめはもっとも大事なことである。夷が上申するにはこれまでずっと唐文（漢語）を用い、永遠にこれに遵ひ執り行ふべきであるのに、どうして議事亭の衆議によつたとしてでたらめに變更を願ひ出ることができようか。許すことが出来ぬばかりか、論し難詰すべきである。… 今後一切夷の上申には從來のやり方にしがたい、もっぱら唐字（漢字）を用いて書き、唐・番^{ポルトガル}を併用するなどのことは許してはならない。」⁹政治的交渉の場で、マカオがようやく中國と對等の立場、そして更に相對的な優位に立ち得たのはアヘン戰爭以後のことであり¹⁰、しかもその時にはヨーロッパ勢力の主役はイギリスに變わっていた。イギリス人は當初、

⁴ヴァリニャーノは、リッチに先立って中國に送り込んだミケーレ・ルッジェリの中國語能力に對して極めて批判的で、その手になる「四書」などの翻譯を出版することに強く反對した。ヴァリニャーノの言語習得に對する要求が極めて高いものであったことを推測させる。Pasquale D'Elia, *Fonti Ricciane*, I, 43, no.1.

⁵「票」は典禮問題に端を發して、康熙帝がその四十五年（一七〇六）に、宣教師の取り締まりを強化するため、生涯中國に留まることを條件に發給したもの。その経緯については、矢澤利彦『中國とキリスト教』（近藤出版社、一九七二）一四六頁以降に詳しい。

⁶この原則は乾隆三十九年七月庚申の上諭でも繰り返されている。これは廣東に着いた岳文輝、楊進德、常秉綱の西洋人三名が北京に行くことを求めたのに對する回答として提示された。『高宗純皇帝實錄』第二十六第四册（『大清歷朝實錄』卷九百六十二）。

⁷もちろん非常に多くの日本人、特に九州の女性が人身賣買によってマカオに來たとされる。また初期には、ポルトガル人と中國人との間には通婚關係などはなく、純粹に交易關係のみであったという。C.R.Boxer, *Fidalgos in the Far East*, p.230ff.

⁸いわゆる Macaense と呼ばれる人々で、その言語は Maquista と稱される。

⁹劉芳輯『清代澳門中文檔案』（上册）四一四頁、八一七「香山知縣楊時行爲飭呈稟遵照舊章專用唐字事下理事官諭」嘉慶八年二月二十一日（一八〇三・三・一四）。

¹⁰アヘン戰爭終結後の一八四五年、ポルトガルは一方的にマカオを自由港として宣言するなど、中國の主權に對し正面か

中国人との意思疎通のために、マカオで長年培われてきたポルトガル系のクレオールを用いていたのだが、やがて日増しに増大する大英帝国の力はそれをピジン・イングリッシュに作り替えていくのである。ピジン・イングリッシュは、クレオールがマカオとカントンで用いられたに過ぎないのに比べ、上海をはじめとする新たに開かれた條約港でより廣範な使用人口を獲得することになる。

さて十六世紀末以来、イエズス會が中國において採用した適應主義的布教法は、時としてカトリック本来の教義に抵觸しかねないものであり、反イエズス會諸派の猛烈な批判の對象となった。イエズス會士は、支配層に取り入る必要から、主たる布教の對象を知識人に求め、當然ながら知識人の言語生活に不可欠な「文語」の學習に力をそそぐことになった。一方で反イエズス會のほうでは、むしろ福建をはじめとする地方の一般大衆に布教する道を選んだ。この態度の違いが彼らの中國語研究にも大きな影響を及ぼしている。イエズス會では、上に見たように当初から中國語の組織的な學習に熱心で、彼らが中國語に関して行った研究や著作は、非常に水準の高いものであった。しかし皮肉なことに、彼らの仕事はヨーロッパでは廣く利用されることがなかったのに對し、ドミニコ會士やフランシスコ會士の編述した辭書や文法は、むしろ盛んにヨーロッパの學者たちに用いられ、やがてヨーロッパ中國學の發展に大きく貢獻することとなる。例えばフランシスコ會士プロック・デ・ジェモーナ (Brollo de Gemona) の二種の漢羅辭書¹¹はヨーロッパに傳わり轉々鈔寫されて廣く用いられ、今日でもヨーロッパの古い圖書館にはこの辭書を所藏するところが多い。ヨーロッパ最初の印刷された辭書として著名なナポレオン欽定辭書¹²は、ド・ギーニュの名前を冠するが、實はこのプロックの手になる辭書にほぼそのままフランス語を添えて印刷に付したものに過ぎない。またドミニコ會士フランシスコ・バロ (Francisco Varo) の『官話文法』は一七〇三年にカントンで木版印刷に付され¹³、少部数がヨーロッパに流入した。コレージュ・ド・フランスのアラビア語教授フルモン (Etienne Fourmont) が、このバロの文法に依據して『中國官話』を著したことはよく知られている¹⁴。バロには官話の辭書もあり、寫本として何點かが傳わっている¹⁵。さらにフランシスコ會士ホラティイ・カストラノ (Carlo Horatii da Castorano) の文法は、公刊されなかったけれども寫本のままで學者間に流通し利用された。アベル・レミュザは寫本を所持していて、しばしばその説に言及している¹⁶。他にも、ドミニコ會士フランシスコ・ディアス (Francisco Diaz)、同アントニオ・ディアス (Antonio Diaz) の辭書もあり、やはり寫本で行われた。

これらフランシスコ會やドミニコ會の中國語學書が、ヨーロッパで受け入れられたのに對して、イエズス會士の著作は利用者に恵まれなかった。たとえばミケーレ・ルッジエリとマッテオ・リッチの手になる『葡漢辭典』は、記念すべき最初の勞作であるが、イエズス會のアーカイヴ中に寫本のまま捨て置かれ、ようやく二〇世紀になって再発見されたに過ぎない。もとよりこの辭書は未完成の稿本であって、そのままでは公刊に堪えないものではあるが、いかにも不遇というべきであろう。またニコラ・トリゴー (金尼閣) の名で出版された『西儒耳目資』(杭州、一六二六)は中國辭書史に燦然と輝く金字塔であるが、この書物がヨーロッパで十分に利用された形跡はない。中国人の利用を念頭に置いたこの著作は、ヨーロッパ人が利用するにはあまりに高級に過ぎたものであろう。一般的に在中國イエズス會では、組織的な中國語學習のシステムを持っていたはずで、會士

ら對抗する姿勢を取り、一八八七年の中・葡「和好通商條約」において竟にその「永久管理權」を手にした。

¹¹ プロックは一部に始まり龠部に終わる部首引きの辭書と、ça に始まるアルファベット順の辭書の二種を作った。プロックの関連資料は *Sinica Franciscana*, Volumen VI, Pars altera (Roma, 1961), 789-1240 に網羅されている。簡便には Giuliano Bertuccioli 氏の執筆になる *Dizionario Biografico degli Italiani*, Vol. XIV (Roma, 1972), "BROLLO, Basilio" の項目を見よ。

¹² Chrétien Louis Joseph de Guignes, *Dictionnaire chinois, français et latin*..., Paris, 1813.

¹³ *Arte de la lengua mandarina*, Canton, 1703.

¹⁴ Stephanus Fourmont, *Linguae Sinarum Mandarinnicae Hieroglyphicae Grammatica Duplex*, ..., Paris, 1742. フルモンの書が剽竊であるという批判については、石田幹之助『歐人の支那研究』(昭和七年、共立社書店)、二二〇頁以下を見よ。

¹⁵ *Vocabulario de la lengua mandarina*. これは一種の「西中辭書」である。

¹⁶ レミュザ所藏寫本は、その藏書目の四九一番に見える。 *Catalogue des livres, imprimés et manuscrits, composant la bibliothèque de feu M. J.P. Abel-Rémusat*, Paris, 1833.

の中國語能力は他の會派の宣教師に比べてかなり高い水準を維持していたに違いないと思われる。したがって初學向けの辭書や文法などを編纂することには消極的で、結果としてそれらはフランシスコ會やドミニコ會のいわば専賣特許のようになったのではあるまいか。辭書や文法を整備することから始めるというのは、彼らが他の地域の布教で行ってきた常套的やり方で、特に目新しい方法ではない。ただ初學向けであることがが却ってヨーロッパの學者たちの歓迎を受けた理由となったのである。イエズス會士たちは、中國世界に沈潛することで、おそらくこの文明とより深く對決した筈であり、その言語研究にも深い洞察が含まれていたに違いないが、その成果が十分具體的な形をとらなかつたことは惜しんでも餘るものがある¹⁷。

注記 小文は『文學』2001年9-10月號（隔月刊第2巻第5號）pp.1-7に掲載されたものと同じである。

¹⁷ プレマールの文法はフールモンに送付されたが、結局、長く日の目を見ることはなかつた。その稿本が出版されるのは、實に一八三一年マラッカにおいて、イギリス人の手によってである。Prémare, *Notitia Linguae Sinicae*。この優れた文法は、またアメリカ人宣教師ブリッジマンによって、カントンで英譯出版された。*The Notitia Linguae Sinicae of Premare*. Translated into English by J.G.Bridgman, Canton, 1847. ただしなお未刊の部分が存在する。